

保育

の

創意工夫

7

園庭の土山

前原 寛

梅雨が明けると強い日差しが照りつけ、夏本番を迎えます。子どもが泥んこになって遊び回る季節です。

私のかかわっている保育園は過疎地域にありますが、園庭はさほど広くありません。その園庭で運動会を実施していますが、見学に来られた方々が「ここで運動会をするのですか」と驚かれるほどの狭さです。

ですから、季節ごとに遊具の配置などを変化させ、狭い園庭を有効に活用する工夫をしています。運動会を行うために、九月から十月にかけて園庭は起伏のない状態になりますが、それ以外の時期は多少起伏があっても問題になりませんので、園庭に土山をつくります。その土山が存在感を最も発揮するのが夏

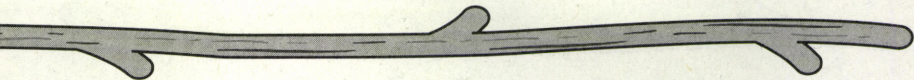
です。

土山をつくるのは、子どもが遊びやすい土質の土が手に入った時になります。粘土質の土は硬くなる上に、表面がつるつるして滑りやすくなり、扱いにくいものです。かといって、すぐ崩れてしまうようでは、おもしろさが半減してしまいます。ある程度の硬さを保ちながらも子どもの扱いやすい土質でないと土山の特性は活かせません。そのような土を、だいたいトラック三台分ぐらい園庭に盛ります。

土山をどのように使って遊ぶかは、子どもに任せられます。駆け上ったり駆け下りたり、三輪車で勢いよく滑り降りたりしています。よちよち歩きを始めた小さな子どもたちにとっては、ちょっとした山登りになります。その土自体が、格好の土遊びも提供してくれます。土山での遊びに子どもは飽きることはありません。

そんな中で、おもしろいなと思ったことがありました。土山をつくったら、子どもたちが、頂上部分をせつせと崩し始めたのです。何日か経ったら、頂上が火口のような状態になりました。何となく桜島に似ています。子どもにとつて身近に親しんでいる山の形があるんだな、と思うことでした。

土山をつくる時期は決まっていますが、夏には必ずといっていいほど、園




庭にあります。暑い時期の土山は、最もいい遊び環境になりますから。

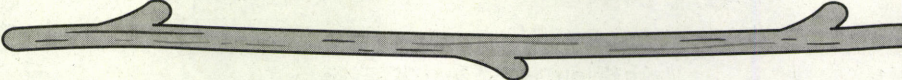
ただし、つくる場所が問題になります。園庭のどこでもいいというわけではありません。夏に木陰になる場所でない、土山での遊びは発展しません。

ある年の土山の位置は、例年よりずれてしまいました。つくった時は春でしたので、あまり気にも留めていませんでした。梅雨が明け夏本番を迎えると、待つてましたとばかりにガラガラした日差しが連日続きます。位置がずれた土山は日差しの中にあり、とても日中に遊べるような状態ではありませんでした。

夏場の直射日光の当たるところでの活動は、日射病や熱射病などの危険があります。日差しを避けるために、園庭には樹齢数十年になる木が何本か植えられています。桜やセンダンなどの落葉樹で、夏には濃い木陰をつくります。園庭の半分以上が覆われますので、子どもたちの戸外活動は、もっぱら木陰で行われています。

園舎は開放的なつくりになっており、クーラーは装備されていません。どんなに暑くても扇風機を動かすぐらいです。クーラーを使わないのには理由があります。クーラーが作動していると、部屋が閉め切られてしまいます。子どもも、冷えて快適な空間があれば、そこから出ようとしくなくなり、室内に閉じこ





もりがちになります。その結果、子どもの戸外遊びが激減してしまいました。そのような事態を避けるねらいがあって、クーラーを使わないようにしているのです。

鹿兒島でクーラーが無いと暑いのでは、と思われるかもしれませんが。しかし、建物が開放的であり、園庭に樹木の木陰が広がっているので、真夏でもクーラーとは違う涼しさを感じられます。

例年、土山は木陰につくるように配慮してはいたのですが、その年は日が差し込む所につくってしまったために、土山での遊びが活発化しませんでした。遊具であれば移動させることもできますが、さすがに土山は動かせません。環境構成としての土山のつくり方について反省することでした。

そんな年もありましたが、毎年夏の間は、土山を使った活発な遊びが展開されます。子どもの遊びがダイナミックになるにつれて、土山は崩されて小さくなっていきます。そして、九月の中旬にはすっかりならされて、運動会を待ち受ける状態になっていきます。

園庭の様相を変える土山の存在は、夏の子どもの遊びになくてはならないものなのです。

(鹿兒島国際大学准教授・元安良保育園園長)